

## チェンマイ大学での貢献 (76)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

所属する学科での授業分担について、新しい動きがあったので記録にとどめておきたい。筆者の最近の職務は

- 1) 講義分担：前期に講義 1 科目、後期に同じく 1 科目、
- 2) 研究室ゼミに参加して学生への研究指導、ガイダンス、アドバイスを授ける、
- 3) タイ政府の下部機関でもあるサイエンス・テクノロジー・パーク (STeP, Science & Technology Park) での各種行事・業務に参加する。

(具体的には国際学会、シンポジウム、ワークショップでの論文発表、各種関連プログラムへの関与・参加、国際交流事業への参加支援、などである。

機械工学科 (Mechanical Engineering Department) から生産工学科 (Industrial Engineering Department) に変わったことや授業対象の履修学生がかつては修士課程 (Master program students) であったが、学部生 (Undergraduate students) に変わったなどの状況変化もあるが、過去の同様の経験を比較して回顧すると、対応に大学側のかかなり衝撃的な変化があることに正直驚きを隠せない。具体的にどの様なことが起きたかを以下に記す。

これまでも既述したように外国人教員が講義 (授業) を担当する場合は必ず所属する大学の学部学科の教員をカウンタ・パート (Counterpart) と分担 (Share) する義務があり一人での担当はできない事になっている。 昨年は日本で言う定時制の修士課程学生 (Part-time Master program student) の講義を分担し、中には極めて仲良くなった学生とも夕食を共にしたりした思い出もある。すでに就職している彼らの実需を考慮為て、講義は土曜日の午後 3 時間 (1.5 時間を継続して 2 コマ実施) と言う内訳である。ただし 1 週間で土曜日のみと言うことである。彼らは大学を卒業後に就職し昼間の仕事を終えた夕刻に大学での講義に出席するのである。一般の学部生との大きな差は殆どの履修学生がかかなり明確な目的意識を持って授業に臨んでいることである。一度社会人として社会に出て学んだ経験が彼らをしてその目的を明確化させたと理解している。英語もかなり理解でき、コミュニケーションも殆ど問題の無いレベルの学生も少なくない。やはり必要であり、重要であると気付くことがモチベーションを高めている。今年のそうした過去の記憶が未だはっきりしているさなか、同じような時期が到来し、今年もと言う事になった。筆者もかなりの期待をして予め下打ち合わせをして、その様に予定が進むと考えていたが、事務サイドとさらに確認のミーティングをする必要が有るとのことで、翌日のミーティングに臨んだ。そこで出てきた問題は、受講した学生のフィードバック意見を収集すると、「英語での講義が余り理解できない、われわれはすでに就職して社会人として働いているので、分からぬ

講義を履修して時間を無駄にしたくない、できることならネイティブなタイ語 (Native Thai speaker) による講義の方が良い」と言うことらしい。筆者に取っては大きな驚きであり、衝撃的でもある。なぜならそうした意見は今まで10年間で聴いたことがないからである。また英語での講義に関する考え方は「国際化」の時代と言う事を考えると、むしろ「英語での講義をやって欲しい」との要望が強かった。しかし学生の意見がそうだからと言ってその要望に従うと言う現状の対応ではかなりの後退であり、後ろ向きの対応である。将来を見ることなく、決して責任をとらないその場限りの対応をする大学の悪しき例のひとつでもある。さらに説明によると定時制の学生は昼間は働き、夜間に講義を受けるために出向いてくる事情背景を考えると時間を有効に使いたいという気持ちを考慮すべきと言う補足説明であるが、この事が筆者の講義負担削減への主たる要望理由でもある。まあ大学がそう言うならそうするしかない、と言う事で筆者本人の負担は大幅に減り、総計2コマの分担で合意し、1つは環境に関する話題を冠した講義、もう一つは特別講義で最近(新)の技術情報を盛り込んだものと言う事で決着した。所詮自らの立場を考えると、積極的に意見や希望を言うつもりはない。結論は既に決まっているからである。悪いか、悪くないかとは無関係に結論が出て来るからである。意見の違いや論争での落としどころは「喧嘩両成敗」だからである。とにかく「逆らわない、深入りしない」ことが無難であるからである。昔はそうではなかった。内部の会議でも多数を占めるタイ教員やスタッフ出席者に対し「タイ語を極力使わず、英語を使うように努力せよ」との上からの通達もかつてはあったが、いまではそうした前向きな雰囲気すらない。今では懐かしい「夢物語」である。荒波で操舵機能を失った箱船のようにいずこへともなくさ迷っている。いわゆる舵取り役であるべき船頭(船長)がいないに等しく、同義語で言う「船頭多くして、船山に登る (Increasing the number of captain steers the boat to climbing the mountain)」と言う諺に同義である。

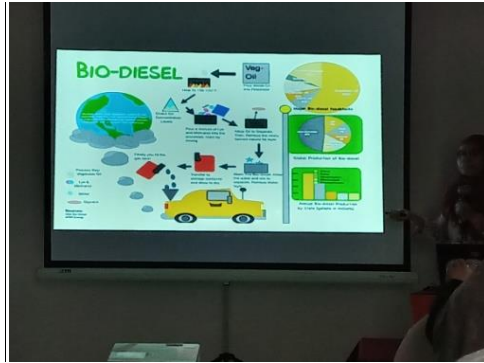
大学教員の中には生来気が合わない。つきあいづらい、とても近寄れないと言う間柄の関係を有する個人が少なくない。昔から大学は一般社会では決して生きていけない偏った人種の集まりから成り立つ、特殊な社会とも言われる。一般社会で協調して生きていくことができない人の集まりと言う極論を言う人もいるほどである。複数の教員の分担講義ともなると講義内容や教え方などを、聴衆である履修学生に比較評価されたくないとの思いが先に立つ。かといって自らの講義内容が分担者のそれより優れているとの評価を得られればともかく、下方に評価されたくはないから、自然と講義分担者とは袂を分かち会いたいと考えるようになる。筆者自身はどうかと言うと、学生の講義に対する今回のフィードバックは、講義内容ではなく英語での講義と言うコミュニケーション (Communication) の不都合にあると言うものである。それも担当教員に失礼が無いように、学生側の英語の理解度が低いのでと言う、学生に大幅に譲歩した説明になっている。よく言えば念入りに配慮した説明になっているが、担当者である筆者自身にとっては、愉快なものではない。そもそも過去にその様な意見を聞いた経験はないし、受け入れ大学側には国際化に向けた

積極的な姿勢が表面に出ているからである。講義を担当する教員が相互に授業参観して学生にとってどうなのかと言う観点から、より内容的に充実した講義内容にしようと言う建設的な考えは出てこない。自らが思うように講義を進めたい、誰からも干渉されたくないと言う思いが協調性を妨げるようになる。殆どの若い世代がこのような思いを持っていると言って過言ではない。となるとこうした教育を受けた次世代もおなじ考えを持って成長する。このような後ろ向きとも思える消極的な姿勢が組織の空気全体を暗くし、低迷した状況を維持継続させている。大きな有名大学ほどこの種の体制が大学の進展に障碍となっているようである。見切りをつけて次第に優秀な人材が大学を離れ、同じような考えを有する者のみが居残ることになるから、殆ど半永久的に大学の発展に見込みはない。大きな大学がこのような事態に陥る原因は、こうしたつまらぬ所に起因する。教員だけではなく、博士課程に進みたいと向学心に燃える学生も、流石に考え直す事になるのは時間の問題である。かつてアメリカにはビッグ・スリー (Big three) と呼ばれた巨大自動車企業があった。言わずと知れたフォード (Ford)、クライスラー (Chrysler)、ジー・エム (GM, General Motors) の3社である。ところが今ではどうであろうか。日本のトヨタとドイツの企業が首位を争っている。年間1,000万台余の車の生産量を誇り、品質評価の面でも世界の上位10社のうち殆どを日本車が占めている。生産工程での5S (Seiri, Seiton, Seiso, Seiketsu, Shituke の頭文字5つを取ったものである)、TQC (Total Quality Control), JIT (Just In Time) システム (別名トヨタのカンバン方式という) の開発導入、改善 (Kaizen) や系列 (Keiretsu) がそのままの表現で通じる程に日本の開発管理技術が製造業に浸透し採用されている。現状維持に満足せず、絶えず前向きに探し求める姿勢が実のある改善を実現し、効果を上げている。企業に限らず大学も組織である以上熱い志を持った同志の集まりである必要があるが、残念ながら向かうべき方向とその速度も異なるから外圧や外力が加わらない限り強い応力は発生しない。大学は異分野の集合体組織であり、協調性が全く無い構成員の集まりで成り立っている。筆者はかつてボランティアで大学院の学生に英語のゼミ (主として国際学会での研究発表プレゼン) を学生の要請を受けて実施したことがあるが、長続きせず学生の方から出てこなくなった。またその学生達の研究室の指導教員はそうしたことを知ってか知らずか、一度として声を掛けに来たことはない。自分の研究室の学生に対してもこのような状況であるから、教育における熱意や研究室の学生指導に関しては推して知るべしのレベルと筆者は感じている。

なお昨年度の同じ講義履修学生のいくらかとは仲が良くなり、夕食を馳走したりする間にも成った。そうした彼らの中には英語でのコミュニケーションにおいてそれほど理解度が低いという者はいなかった。必要に迫られれば上達は早い。一度社会の風に当たった彼らの勉強姿勢は学部生が如きとは明らかに雲泥の差が見られる。残念ながら英語が理解できる学生の割合が、理解できない学生の割合より少ないために、上のレベルを目指すのではなく低いレベルに標準を合わせた形の対応になっている。大学のリーダー・シップは何処に行ったのかといふかる。大学が凋落の軌跡をたどる兆候にも見える



大学で開催の国際シンポジウムでの参加  
学生による研究論文発表



左と同じ国際シンポジウムでの他の  
学生によるバイオディーゼル燃料に  
関する研究発表